

花と緑の奈良吟行会（令和6年4月14日…東大寺総合文化センター）

特選・入選句

今井 豊 選

特選

飛花落花影入れ替へて入れ替へて  
吹きあがる花瓣仔鹿の鼻に着き

山崎 隆代  
木村 蝸牛

入選

二月堂花散る中の深眠り  
大仏へはちきれさうな春キャベツ  
古瓦土留めに佐保の芹白き  
日をあびて草の句の孕鹿  
白毫寺の椿は咲いてゐましたか  
残桜や観相窓は閉ぢしまま  
神籤読む残る桜の花に寄り  
草や木やひかりの四月東大寺  
仁王の足浮かす力学鳥の恋  
大仏は嗚呼と見上げて長閑なり  
人らみな花下をただよふばかりなり  
堂ひとつわがものとして猫の恋  
竹秋の風声明と和しにけり  
咲き満ちて零るる花の浄土かな  
車窓より頁繰るごと花の山  
いつかまた不帰の客らと花の宴  
大仏の鼻むずむずとさくら時  
埃積みて長閑なりけり仁王像

黄土 眠兎  
角野 京子  
北村 峰月  
師岡 洋子  
国光六四三  
はせ 淑子  
徳永 真弓  
志々見久美  
山崎 隆代  
師岡 洋子  
谷口 智行  
岩津 厚子  
山根 真矢  
土屋 順子  
宮谷 昌代  
加藤 幸枝  
浅田 光代  
中家 桂子

岩津 厚子 選

特選

吾も風とひとつに枝垂桜かな  
また一つ春の名残へ時の鐘

加藤 草児  
浦野智加男

入選

大仏へはちきれさうな春キャベツ  
大仏を眼に収め花は葉に  
春闌くや主屋に残る虫籠窓  
仁王の足浮かす力学鳥の恋  
大仏は嗚呼と見上げて長閑なり

角野 京子  
苺 羊右子  
中島 佳代  
山崎 隆代  
師岡 洋子

あたたかや餓鬼のひれ伏す戒壇院  
原生林ひのきの花粉漲らし  
藤棚のいよよ紫がかりけり  
竹秋の風声明と和しにけり  
花筏二月堂より流れけり  
面を彫る鑿さくさくと花明り  
双曲線描きて藤の垂れはじむ  
目と耳で鹿に見らるる花の闇  
大いなる門を起点の野がけかな  
鳥声を浴びつつ落花浴びにけり  
大仏に恭しくも春埃  
座りたき御手のレプリカ春の昼  
鴟尾は日を弾きかへして夏隣

田中 清司  
杉坂 徹  
河野 孝子  
山根 真矢  
山根 真矢  
齋藤 利明  
藤原 省吾  
鳥越やすこ  
小林伊久子  
福西 泰子  
中納弓生子  
上田よしみ  
植松 秀子

### 越智 巖 選

#### 特選

塔頭の防火バケツに花片浮く  
浄土へと向うてゐたる蜷の道

西垣富紀子  
平 万紀子

#### 入選

賑はひをよそに氷室社花散りぬ  
奈良盆地つぶさに二月堂の春  
訪ふたびに仏の黙や春惜しむ  
御旅所の今は静かや花は葉に  
幼児にいくどもお辞儀孕鹿  
鹿の糞ものは奈良の青き踏む  
うすうすと花の残り香八一の碑  
奈良公園よちよちの子へ飛花落花  
花時の奈良に国境なき笑顔  
戒壇堂階きつし花の塵  
春落花ひらひら舞ふや古都の寺  
バスに乗りいねむりをする花疲  
大仏にくすぐる如く若葉風  
ならまちの石垣長しすみれ咲く  
鹿苑を見て御衣黄に手を合はす  
風に乗る鹿の抜け毛に春惜しむ  
緑さす直哉旧居の文机  
面を彫る鑿さくさくと花明り

森田 教子  
堀 瞳子  
古川 邑秋  
森 可穂  
池田 和子  
阿部由希子  
迫 恵美子  
福田千代子  
富田 美子  
谷口 年子  
東 照子  
内田 明子  
西岡たかよ  
森賀 まり  
中村 敏之  
山内 節子  
村井津哉子  
齋藤 利明

倉橋みどり 選

特選

大仏へはちきれさうな春キャベツ  
ちちははと大仏殿へ花の昼

角野 京子  
中間 一司

入選

飛火野の眩しさ蝶の生まれけり  
東大寺広し広しと踏青す  
腹筋の光る仁王や若葉風

田中 春生  
坂元 軒二  
貞許 泰治

飛花落花影入れ替へて入れ替へて  
盧舎那仏世界の人に花吹雪  
のどけしや見目よき鹿が付いて来る

山崎 隆代  
廣瀬 正樹  
常澤 俣子

若草山膨れてみたる花は葉に  
大仏のおもどつしり長閑なる  
気にかかる仲間外れの春の鹿

西本 真里  
古橋 寛人  
藤井 章子

人はみな鹿を撫でゆき春惜しむ  
奈良太郎真下で見上ぐ春の闇  
また一つ春の名残へ時の鐘

岩井 英雅  
南田 英二  
浦野智加男

惜春のまなぶた重き盧舎那仏  
吾も風とひとつに枝垂桜かな  
礎石より礎石へ春を惜しみつつ

湯浅ちかえ  
加藤 草児  
堀 康恵

春風の撫でてゆきたる奈良太郎  
初つばめ五重塔の影を切る  
天平の時空を越ゆる飛花落花

高松早基子  
金子 恵美  
金子 恵美

谷口 智行 選

特選

孕鹿の胎動あはれ餌に寄り来  
竜天に登る仁王に見守られ

森下久美子  
清水寿恵子

入選

花人となりて南都に迷ひこむ  
鹿の糞ものは奈良の青き踏む  
こんなにも桜のこりてあるなんて

山近由美子  
阿部由希子  
山近由美子

神籤読む残る桜の花に寄り  
乗つ込みの大仏池を使い切る  
赤ん坊の欠伸桃色うらけし

徳永 真弓  
延永 和枝  
酒井多加子

のどけしや見目よき鹿が付いて来る  
ガイド嬢かかぐる旗に鯉幟  
遠足の子ら覗き込むものはなに

常澤 俣子  
堀 康恵  
堀 真一路

仁王の足浮かす力学鳥の恋  
亀鳴くや三作石子詰の墓  
鹿を呼ぶフォルン唳々春の古都  
祭神は先祖のひとり囀れり  
大屋根に十字架をのせ花の寺  
神にませば糞も香ばし春の鹿  
春日山若草山と緑立つ  
ひとときに乗つ込み果つる仏池  
鹿苑を見て御衣黄に手を合わす

山崎 隆代  
富田 美子  
内田あさ子  
藤原 省吾  
前田 みき  
渡口 行雄  
西原 薫  
小島 元博  
中村 敏之

田中 春生 選

特選

行春や細き腕の阿修羅像  
礎石より礎石へ春を惜しみつつ

廣瀬 正樹  
堀 康恵

入選

腰引いて鹿に餌やる若葉風  
空よりも樹下の明るし花楓  
花疲鹿にもそつぽ向けらるる  
孕鹿我慢の貌をちらと見せ  
青空に絵巻なすと若楓  
目をあびて草の匂の孕鹿  
腹筋の光る仁王や若葉風  
鹿の糞ものかは奈良の青き踏む  
南大門跨ぎかねをり花疲  
鬼の子のごとく角生え春の鹿  
大仏は嗚呼と見上げて長閑なり  
朝の日を啄むやうに囀れり  
人獣水辺に降りて春惜しむ  
石畳歩いて飛花の中にある  
さへづりや内陣くらき二月堂  
誇らかに鴟尾春光を照り返す  
せせらぎをゆつくり渡る孕鹿  
小流れをためらはず跳び春の鹿

小寺 昌平  
藤田 駒代  
阪野 雅晴  
大谷 昌子  
山本 好子  
師岡 洋子  
貞許 泰治  
阿部由希子  
山本ヒロ子  
東 照子  
師岡 洋子  
西宮 舞  
詫間えりこ  
高松早基子  
浅田 光代  
森下まゆみ  
河村 淑子  
手拝なをみ